

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530620

研究課題名(和文) グローバリゼーションの社会学的研究と課題

研究課題名(英文) Sociological Issues of Globalization Studies

研究代表者

伊豫谷 登士翁 (IYOTANI, TOSHIO)

一橋大学・ 名誉教授

研究者番号：70126267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで人々の定住を常態と考えてきた社会科学の枠組みを移動から捉え返し、社会学からグローバリゼーション研究にいかなる貢献が可能であるか示したものである。グローバリゼーションは、現代世界の諸領域で起こっている諸変化を捉えるキーワードであり、グローバリゼーションを研究することは、社会科学におけるこれまでのナショナルな領域を前提としてきた分析枠組みとナショナルな歴史認識の再検討を必要とする。移動と場所の関係を相対化し、他の研究領域との接点を広げて、グローバリゼーション研究のひとつとして、現代における人の移動を捉える方法と観点を提示した。

研究成果の概要(英文)：The social sciences have been historically premised on the political and social domains of the nation-state and, because of this, they have come to an understanding of people that move as somehow deviant from the norm. Understanding globalization requires more than just acquiring a grasp of the changes happening in and to the contemporary world. It requires that we reconstruct previous social scientific frameworks of analysis for the present, and reform our understanding of that history which, up until now, has been written as the history of the nation-state. This research presents a new methodology for understanding the movement of people in the age of globalization through relativizing the relationship between movement and place and expanding upon its insights through key points of contact with other disciplines

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：グローバリゼーション 移動 場所 ネオリベラリズム コミュニティ アジア 多文化主義

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初のグローバリゼーションをめぐる研究状況ならびに研究テーマ、および社会学にとっての課題は以下の通りである。

### (1) グローバリゼーション研究(以下G研究)をめぐる状況

グローバリゼーションに関する研究は、国際機関や学会におけるシンポジウムの主要なテーマとなり、国際的なコンソルシウムが形成され、活発な研究が世界的な規模で実施されてきた。その研究の中心になってきたのは、英語圏の大学であった。

多様な研究状況は、いくつかの論集として公開されてきている。その代表的な研究成果として、F.J. Lechner & J. Boli eds., *The Globalization Reader* や R.P. Appelbaum & W.I. Robinson eds., *Critical Globalization Studies* がある。また、R. ロバートソンや M. アルブロウ、M. フェザーストンあるいは M. ウォーターによる問題提起、さらに社会学から A. ギデンス、M. カステル、U. ベック、S. サッセン、J. アーリ、Z. パウマンなど有力な研究者による研究書やテキストが出版され、その多くが邦訳されてきた。

日本においても、グローバリゼーションは、政治や経済だけでなく、文化や社会、歴史や地域研究などの学会において取り上げられ、学会誌や雑誌の特集が組まれてきた。またアジアの国際的な学会などにおいても、グローバリゼーションは主要なテーマとなってきている。

### (2) G研究のテーマ

G研究が扱うテーマは、多様であり、当初の経済に関わるテーマから、地域紛争・環境・貧困などへと拡がり、さらにジェンダーやエスニシティ、アジアといった個別テーマが取り上げられるようになった。1990年代から2000年代におけるグローバリゼーションの肯定的な評価から否定的評価への転換を経て、否定/肯定の価値判断からは距離を置いたG研究の制度化の方向が見られる。

グローバリゼーションは企業のキャッチコピーなどから学術用語として定着し、反グローバリゼーション運動の高まりに対応して、アジアを含めた発展途上国での関心も生まれてきた。しかし、歴史としてのグローバリゼーション、方法的ナショナリズムからの脱却という課題に取り組むには至っていない。

社会学においても、グローバリゼーションは主要な研究課題になってきているが、他分野でのG研究の成果との接点を築きあげることに成功しておらず、また国際社会学、エスニシティ研究、移民研究などの社会学の研究領域との方法的な差異を自覚するには至っていない。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、G研究の方法的な枠組みを社会学という分野から、日本あるいはアジアを場として再考することにある。

### (1) ナショナルな境界を所与としてきた研究枠組みの自覚化

社会学は独自の体系性を欠いた学問分野であると言われてきた。しかし社会学は、体系性を持たなかったがゆえに、G研究の課題やテーマを拡げ、制度化された研究の枠組みを容易に乗り越えうる分野でもある(J. アーリ)。ナショナルな枠組みを暗黙の前提としてきた社会学の議論を批判的に組み替えることを通して、社会学という観点からG研究を再検討した。方法的ナショナリズムを批判することはそれほど困難ではないとしても、国家に代わりうる秩序を構想しえない以上、そこから脱却することは容易ではない。まず取りかかるべき課題として、現代に連なるナショナルな枠組みが推進された総力戦体制の時代に、どのように学問の体系化や制度化が行われてきたのかを明らかにすることが必要であった。

### (2) グローバル/ローカルという課題 アジア/日本からの問題提起

G研究の中心は欧米、とくにアメリカであるが、近年では、アジアの主要大学においても定着しつつあり、そこでは、欧米の議論の紹介から脱したG研究をどのように展開することが可能か、模索されてきている。本研究では、アジア、とくに日本からいかなる課題を提起することが可能かを検討した。

グローバルとローカルは、対抗的であるだけでなく、相補的な共犯関係にある。グローバリゼーションの相補的な共犯関係を解く鍵のひとつとして「人の移動」がある。移動がグローバリゼーションのキー概念であることは多くの論者が指摘することであり、「移民研究」や「格差社会論」が陥ってきたナショナルな思考枠組みを脱して、G研究に対して、日本を含むアジアからの社会学の新たな論点を提示できるものと期待できる。

### (3) グローバリゼーションの新たな局面に対応した課題

グローバリゼーションは、近代が抱えてきた課題でもあるとともに、近代化が引き起こしてきた個人化や大衆消費社会現象の課題でもある。現代の貧困や紛争は、これまでの社会科学が対象としてきた問題枠組みとは異なってきており、G研究の問題として捉え返すことが要請される。

グローバリゼーションの起点として、1960/70年代をおくとして、冷戦崩壊やアジア危機の90年代以降、新たな局面が展開してきている。G研究は、その新たな局面から、近代の歴史を含めた再構成

を考える必要がある。

### 3. 研究の方法

本研究は、(1) G 研究を三つのレベルに分け、(2) 社会学分野からの課題として「人の移動」に焦点を当て、(3) 他の諸分野の研究者との共同研究を推進してきた。

#### (1) G 研究の三つのレベル

G 研究は、「越境的な現実によって生み出される一連の理論的、歴史的、認識論的、そしてさらには哲学的問題」(アベルバウム)にかかわり、本研究においては、G 研究を次の三つのレベルで捉えた。

近代とは区別される現代世界の転換の諸相を明らかにする具体的な政治や経済、文化や社会の諸課題をあつかう〔事象としてのグローバリゼーション〕

近代を対象としてきた従来の学問分野、とくにナショナルな領域を暗黙のうちに所与の前提としてきた諸社会科学の研究枠組みの組み替えを問う〔方法としてのグローバリゼーション〕

発展や合理性、自由や平等などの言説によって特徴づけられる近代を批判的にとらえる歴史認識を踏まえて、グローバリゼーションの時代と呼ばれる現代の歴史認識の転換を視野に入れた〔歴史としてのグローバリゼーション〕

社会学においてこのような方向で仕事を行ってきた研究者のひとり、S. サッセンである。サッセンは、最新の著書(*Territory, Authority, Rights*)において、グローバリゼーションが近代世界のナショナルな体制的枠組みをどのように再編・構造転換してきているのかを問うことによって、グローバル対ナショナルという対抗で捉えてきた知のあり方を批判している。

#### (2) G 研究としての「人の移動」

G 研究を進めるひとつの観点として、グローバル対ナショナル、あるいは移動と場所という対抗図式の再考が必要とされる。近代における人の移動が国民国家の形成を引き起こし、各国の移民政策は国民国家のあり方が投影されたものであるとするならば、現代の人の移動に関わる研究領域は、国民国家の揺らぎや解体を反映したものであり、政策がもつ基底的な意義などを捉え返すことができる。

現代の人の移動のもっとも重要な特徴として場所の喪失を位置づけ、これまでの移民サイクル論や出稼ぎ移民論などの研究を再検討する。

国民国家の完成形態としての戦後体制における人の移動の起点として、第二次世界大戦後の引き揚げと帰国に焦点を当てて、戦後期における国民国家の再編成と国民交換の諸相、その日本的特徴としての「帰国事業」や「引き揚げ政策」を考える。

#### (3) アジアにおける研究者との共同研究

G 研究が英語圏を中心に展開され、社会科学がこれまでの扱ってきたいわば「普遍」的なテーマに偏ってきたのに対して、日本研究を含めたアジア研究のなかでは、アジアを場としたテーマが取り上げられるようになってきている。アジア研究者との交流は、アジア固有の課題を見出し、またアジアから G 研究を発信する意図がある。本研究では、最近の G 研究の主要な課題のひとつとしての中国、日本を含むアジア研究者との交流を進めた。

##### 中国に関して

中国人研究者のグローバリゼーションへの理解は、基本的には経済にあるが、日本研究など他の分野へと拡がりつつある。しかし、中国では、地域的な差異が顕著であり、いくつかの都市(北京、上海、杭州)において交流を持った。

##### 韓国ならびにオーストラリア、アメリカのアジア研究者との交流

戦後日本の引き揚げ/帰国事業を韓国側から眺めることが持つ意味を、釜山での引き揚げ・帰国ならびに米軍占領の調査を行い、韓国人研究者との共同研究を進めた。

オーストラリアは、白豪主義から多文化主義へのラディカルな移行、タンパ号事件に見られる難民問題など、人の移動に関わる諸課題が、明確な形で政治化されて現れる国であり、オーストラリア研究者との交流を通じて、現代の移民に関わる諸問題を深めた。

### 4. 研究成果

研究成果は、国内外における会議での発表ならびに研究成果としての著書の公刊を通じて行ってきた。社会学という観点から問題提起をする上で選択した課題は、移動から場所を考えるということであった。課題を遂行するために、(A)社会学における研究動向をフォローする研究会、(B)三・一一以降の衝撃を受けた社会科学におけるパラダイムの転換を考察する研究会、(C)人の移動を新たな視角からとらえる試みとして人文科学の研究者との共同研究、の三つの研究プロジェクトに関与してきた。

(1) 研究会の研究成果は、以下の著書を公刊した。

(A) に関しては、『移動から場所を問う』(有信堂)

(B) については、『コミュニティを再考する』(平凡社)

(C) については、『帰郷』の物語/「移動」の語り』(平凡社)

(2) 学会ならびに海外研究者との共同研究学会等の研究発表や海外研究者との交流を通じて、グローバリゼーション研究の範囲ならびに方法について多くの刺激を受けるとともに、いくつかの課題も認識することができた。

課題を全体としてまとめあげ、理論的な方法を考えていく上で、アジアという場

は不可欠のテーマになりつつある。市場化の拡大や格差の深刻化は、欧米諸国以上に重要な課題として認識されており、政治不安と環境問題と相まって、G研究の主要なテーマとなっている。これらの課題は、植民地主義の残された問題でもあり、グローバルとナショナルの相補的な補完、総力戦体制からグローバリゼーションへの歴史的転回との関わりは、今後のテーマである。

移動から場所を捉えるということは、移動と場所のいずれかを常態と考えることではなく、両者を同じ平面に置くことによって、移動と場所のダイナミックを解き明かすことである。そのためには、各地域の歴史的／地理的な固有性が持つ意味を考えなくてはならず、研究ではその方向性を示すに留まらざるを得なかった。

国際学会や海外研究者との交流を通じて、あらためて、G研究そのものがナショナルな研究体制を基盤として受け止められてきたこと、近代の「普遍」としての理念や理論と地域の固有性という二項的な研究方法が支配的であること、しかしG研究はそこを越える必要があることを再認識することができた。

### (3) 残された課題

G研究が9・11の衝撃を受け止めてきたことは、多くの論者の指摘するところであった。しかし日本の知的な状況を考えるときに、3・11の衝撃は、さらに大きなものであり、近代技術ならびに知の枠組みの奢りが明らかになったとともに、権力や権威の凋落が明白なものとして示され、研究における言葉の軽さが指摘されてきた。日本からG研究への貢献を論じるには、3・11の衝撃を理論的にも、さらに実証的にも、海外に発信することが求められる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [学会発表](計 10件)

伊豫谷 登土翁、『「多文化共生」の両義性』、東アジアにおける人の移動と多文化共生、長崎大学東アジア共生プロジェクト、国立民族博物館・長崎大学、2014年2月9日、長崎大学(長崎県)

伊豫谷 登土翁、『越境移動をどう捉えるか - ディアスポラ、シティズンシップ、アイデンティティ』、越境移動のダイナミズムと多文化主義／多文化共生、青山学院大学国際交流共同研究センター助成：国際交流基金、2013年12月7日(土)青山学院大学(東京都)

伊豫谷 登土翁、『日本における移民研究の課題』、学振ナイロビセミナー、2012年11月26日 日本学術振興会ナイ

ロビ事務所(ケニア・ナイロビ)

伊豫谷 登土翁、『東アジアからみたグローバリゼーションと人の移動』、広島市立大学「アジアに開かれた共同体」ワークショップ(招待講演)、2012年05月12日～2012年05月13日、広島市立大学(広島県)

伊豫谷 登土翁、『人の移動／ジェンダー／グローバリゼーション - 「移民」のジェンダー分析：課題と可能性 - 』、移民学会、2012年6月30日、神戸大学(兵庫県)

伊豫谷 登土翁、『グローバリゼーションと移民』、みんぱくゼミナール第400回記念、国立民族博物館、2011年9月19日(大阪府)

Iyotani Toshio、『Rethinking Japan's Migration Experience: Postwar and Beyond』The Discourses and Memories on Trans-border Movements in Postwar Japan and Beyond、2011年8月29日、オスロ大学(ノルウェー)、

#### [図書](計 5 件)

伊豫谷登土翁、平田由美、朴裕河、西川祐子、坪井秀人、美馬達哉、ブレットド・バリー、テッサ・モーリス=スズキ著、『「帰郷」の物語／「移動」の語り』(pp.330)、平凡社、2014.1

「移動のなかに住まう」pp.5-26

「移動経験の創りだす場-東京島とトウヨウ島から「移民研究」を読み解く」pp.293-327

伊豫谷登土翁、松村美穂、山岡健次郎、高野麻子、小ヶ谷千穂、マーク・ウィンチェスター、山脇千賀子、飯笹佐代子、『移動という経験』、(pp.240)、有信堂、2013.8

「『移民研究』の課題とは何か」pp.3-25

「政治の陰としての『移民』」、pp.27-43

「グローバル空間としての『アジア』と人の移動」、pp.211-232

伊豫谷登土翁、吉原直樹、斉藤純一、『コミュニティを再考する』、(pp.203)、平凡社、2013.6

「はじめに」pp.10-13

「豊かさを共有できた時代の終焉」pp.47-88

宮島喬、友枝敏雄、遠藤薫、伊豫谷登土翁、吉原直樹、園田茂人、牟田和恵、長谷川公一、船橋晴俊、盛山和夫、山田真茂留、丸山哲央、黒石晋、中井豊

『グローバリゼーションと社会学』、ミネルヴァ書房、(pp.323)

「グローバリゼーションの経験と場所」pp.19-37

金泰旭、金聖哲、伊豫谷登土翁他14人、『ひとつのアジア共同体を目指して』、お茶の水書房所収、(pp.261)

「東アジアからみたグローバリゼーションと人の移動：現状と認識」  
pp.121-141

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊豫谷 登土翁 (IYOTANI TOSHIO)

一橋大学・名誉教授

研究者番号： 70126267